

1 開会

2 全体協議（石井コーディネーター）前半

本日は全 4 回のうちの 2 回目ということで、今回からいよいよ中身の議論に入っていくということになる。前回欠席で今回からの参加という方もいらっしゃると思うが、全く問題なく今日から一緒にスタートしていきたいと思う。まずは前回欠席の方の自己紹介をお願いしてもいいか。自己紹介の内容は前回と同じく名前、お住まいの地域、どんな人か（職業や趣味など）、テーマについての一言、参加動機。

～～～自己紹介～～～

（石井コーディネーター）

今後どうしてもご都合がつかないということもあると思うが、ぜひ最終回までよろしくお願いします。これから今回は何をやるのかということとを二点説明する。まず一つ目は発言していただくこと。しかし会議は 3 時間しかないため一人ひとりから意見をいただく時間はそんなにとることができない。もう一つは改善提案シートの記入。皆さんが思ったことや考えたことを書いて提出していただきたい。オンラインではなく対面の場なので、誰かの話を聞いてぱっと思いついたりすることが発言することのいいところ。書くことのいいところは、それぞれの考え方が正確に伝わるということと一度に大量の情報を出すことができるということ。意見を言うことと、シートを書くことの両方をお願いします。

【改善提案シートの書き方（ルール）について。】

例として、シートの上部に「公園が利用されていない」という課題が書いてある。これは、「公園に人がいっぱいいてにぎわっている状態」が理想だと思っているから公園が使われていないことが課題だと考えることになる。例えば、近所に住んでいる人がいて、いつも公園がうるさいことに困っているとすれば「誰も使っていない静かな公園」の方が理想だと考えることになる。つまり、この人にとって公園が使われていないことは課題ではない。どういう状態がその人の理想、あってほしい姿かということで課題と捉える事象は変わる。前回いただいた意見の中でも、部活が毎日あることがいいことだと考える人もいれば、部活が毎日あることで他のやりたいことができないと考える人もいる。今回のテーマに沿って、課題だと思ったことを書いていただきたい。それに対して、どうしたら解決できるかということ「個人でやること」「地域（自治会など）がやること」「行政がやること」「民間がやること」に分類して思いつく限り書いてほしい。今日はなるべくたくさん書いていただいて、次回までには皆さんがどんなことを書いて、どんなことを話したのかということを集計して南陽市の中学校の課題としてまとめる。

【前回までのまとめ】

前回は皆さんに自己紹介をしてもらった後、南陽市の中学校、中学生のいいところ、もうちょっと何とかならないかなというところの話をしていただいた。すごくたくさん意見が出ていたと感じたのは地域との関わりかたの話。施設や部活についてもいいところとそうでないところの両方の意見をいただけた。今日は前回の続きから話を始めるが、いいところはそのままにしておいても変わらずいいところなので、こ

がちよっと…の部分について少しずつ皆さんと話しあっていければと考えている。そのため、前回終了時にできたら少しテーマに関する課題について考えてきてほしいと伝えた。

(委員自由発言)

中学生の下校について、部活が終わってから遅い時間に女の子が一人で帰っているのを見かける。市内で熊やイノシシが出ることもあるので、非常に危険。スクールバスが利用しやすい地区が限られているので、バスに乗って帰ることができるように運行ルートの見直し、拡大をしてほしい。

(石井コーディネーター)

あるべき姿は「安全に帰りたい」ということ。帰り道が危険だということが課題で、解決方法は「行政にスクールバスのルートを見直してもらう」、スクールバスが走っていない地域であれば、「同じ地域で迎えに行く車に乗せてもらう」個人であれば、「近くの子も一緒に帰る」という解決が例として挙げられる。そんなイメージでさきほどのシートを記入してもらいたい。

今回は南陽市の課長さんにたくさん出席していただいているのでここで自己紹介に移ろうと思う。お名前と担当している業務をお願いします。

(財政課 高橋課長)

赤湯小中学校出身。予算の編成と分析、財産管理や公共施設全体の計画のとりまとめなどもしている。赤湯温泉の源泉管理と公衆浴場の管理運営も担当している。

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

赤湯小中学校出身。もともとは小学校の教員で、今は行政で従事している。主に学校教育関連のソフト面(学習指導など)について担当している。

(教育委員会 管理課 鈴木課長)

宮内小中学校出身。学校施設の管理やスクールバス、学校給食などを担当している。

(教育委員会 社会教育課 山口課長)

荻小学校・吉野中学校出身。社会教育の名の通り、公民館や青少年教育などを管轄している。学校教育については、13年前に、自分の子どもが中学生の頃に PTA として中学校の統合問題に関わった経験がある。

(みらい戦略課 嶋貫課長)

事務局を担当。皆さんから意見をいただきながら一緒に考えていけたらと思っている。

(石井コーディネーター)

役所のことを市民の方だけで話すとなると事実がわからないこともあるので、ここで待機していただいている。わからないことがあるときは教えていただきながら進めていきたい。

(委員自由発言)

ここ最近暑くなってきていて、中学校で部活をするかしないかの判断が厳しくなっている。暑さ指数で短縮したりしてくれているが、許可が出ている子以外は自転車で通学することができない。自分の子どもは歩いて通っているが、先日、暑さの影響で部活が中止になり、学校に着いてすぐ帰ってきたことがあった。自転車通学の基準の緩和をして、最も直射日光を浴びやすい通学の負担を減らしてほしい。

(石井コーディネーター)

土地勘がないのでわからないが自宅から学校まではだいたいどれくらいかかる？

(同上委員)

川沿いを歩いて徒歩 10 分程度だが、授業参観等で自分自身も学校まで歩いていくことがあるが、日影がなくずっと直射日光を浴び続けることになるので子供には厳しいと感じる。

(委員自由発言)

参加者は、昔自分が中学生だった頃の記憶になってしまう。自分ごと化会議を実施するにあたって、まず前提として今の中学校の状況等を共有していただきたい。

(石井コーディネーター)

前回、その共有ということで生徒数の話と築年数の話はしたが、具体的な生活(学校の様子など)の話はできておらず、中学校のイメージが委員の皆さんの中学校時代、お子さんの中学校時代で止まっていると考えられるので、学校教育課長から最近の中学校の様子や南陽市の中学校は何を目指しているのかなどについてお話ししていただきたいと思う。

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

現在の児童生徒数について、市内の小学生は 1,357 人。中学生は 759 人となっている。この数は年々減ってきていて、今後も右肩下がりの状況が続いていくと考えられる。市内の義務教育での指導については、お手元の資料「第六次南陽市教育振興計画」で説明する。最も大事にしていることは、資料を開いていただいた右下に記載のある「地域総合型教育」である。子供たちを取り巻く教育環境が大きく変わってきていることから、課題が山積している状況にある。その課題の一つに、学校単独ではなかなか解決できないものが出てきている。

地域総合型教育には柱が大きく二つあり、一つは幼保・小・中と一貫した取り組みを進めていくこと。当該学年だけ輪切りにすることなく、これまでの学びの内容や今の学びがどういう風につながっていくのかということのを思い浮かべながら日々生活する取り組みを進めている。

二つ目は、社会参画活動というものをやっている。前回の皆さんのお話の中に、地域との関わりや行事への参加などの意見があったが、それは各校の校長先生が、教育計画を理解し、各校にあった地域に出る学びを積極的に教育計画の中に取り入れているため。例えば、祭りでお神輿を担いだり、ボランティア活動で一人暮らしのお年寄りの家に行ったりということを委員の皆さんも経験されたかもしれない。今度は市民運動会が中学校の授業日になって、中学生といえど、一人の市民として高い志をもって社会のために、他の人のために、自分のために活躍できる力を発揮できる大人に成長してもらいたいと思ってこの計画を進

めている。

具体的に、中学校で日々どんな取り組みを行っていくかについては、ほぼ毎日その日の活動の様子が各校でアップされている、中学校のホームページをぜひ参照していただきたい。

(石井コーディネーター)

ありがとうございました。追加で聞きたいことがあればどうぞ。

(同上委員)

人数減少によってどんな問題があるのかなどの肌感覚的なところを教えてください。

(石井コーディネーター)

それでは、生徒数が減少している中で生徒の雰囲気は昔とどう変わっているかをご説明いただきたい。

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

教員を 30 年ほど続けてきて、あくまで個人的な感覚ではあるが、学校にいる子どもたちの学びたい、できるようになったら嬉しい、友達と遊びたいという姿勢というのは変わっていないと考えている。しかし、周りの状況が大きく変わっている。例えば、一人一台タブレット端末が貸与されていること。児童や生徒がタブレットを活用した学びが一般的になりつつあるというところ。この動きについてはとても急激に変化していると感じている。家庭環境についても平成の初期に比べて変化しており、当時は祖父母と一緒に住んでいる家庭が多かったが、現在はそうではなく、両親と子どもだけの家庭が多い。細かいことだと、緊急の場合に連絡する連絡先がそれぞれの家の固定電話から両親の携帯電話になったということが挙げられる。こうしたことも社会状況の変化だと思っている。また、南陽市では国が定めている学級数・生徒数ではなく、市独自の基準にのっとった生徒数で地域に合った教育を進めており、これまで長く小規模校を残し、その良さを十分に活用した教育を進めてきた。しかし、現在は多様性が重視される。多様な意見を聞き入れて自分の考えを伸ばし広げていく、ということのウエイトや重要性が語られている。そんな状況において、小規模校の良さを前面に出していくだけでは、子供たちにとって望ましい教育環境といえるのかということについては、地域の方や保護者の方から意見をいただき、議論を重ねてきている。

(委員自由発言)

部活のことについてだが、生徒数が少なくなってきた中、先生方の働き方改革も進められており、地域移行の話なども耳にすることがある。中学校において部活の数は減ってきているのか？

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

実際に、部活動の加入生徒数が 1 人だったり、新規で入部する生徒がいなかったりという事例がある。また、3中学校に全て同じ部活動が設置されていない。生徒のニーズも多様になってきていて、入りたい部活動がないということもある。現在、部活動は任意加入となっており、いずれかの部に入るか入らないかというところから生徒自身で選択するというところになっている。三年生が引退すると下級生だけでは団体競技のチームが組めない人数になってしまう事例もあり、隣の学校と合同で参加することもある。

(石井コーディネーター)

つまり、生徒数が少なくなれば競技人口も減るという状況の中、チームが組めなくなったり、対外試合の際は合同チームを組むことになるということもあるということ。

(委員自由発言)

教員のことで聞きたいことがある。自分が中学生だったころは、病休や産休の教員の代替教員を補充することができず校長や教頭が教壇に立ったり、英語の免許を持っていない先生が英語を担当したりすることがあったが、現在の南陽市の中学校において教員数は足りている状況か。

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

学校の教員数は、学級数をもとに決められている。試験に受かって正規に採用されている教員と、臨時任用＝講師の教員をあわせて各学校の教員数が決まる。市内の中学校においては、定数を割るという状況はない。しかし、育児休業等で減数が発生した際に必ず代替者が見つかるということに関しては、南陽市単独で実施しているものではなく、県からの任命によるもの。県の教育委員会からは人材が不足しているとの話もある。現在、市内中学校において代替教員がないということはない。免許外の教科を受け持つ教員はいる。なお、教頭は授業を担当することになっており、緊急的に教壇に上がっているわけではない。

(石井コーディネーター)

他の自治体でも似たようなことは起こっていて、来月から来てくださいと言ってもなかなか教員が見つからないのが現状だと思う。私の市では校長先生が仕方なく授業を行うこともある。今のように、現状を知りながら一緒に課題を見つけていくことをベースに進めていくので、生徒数が減るということを中心に、意見や経験談などがあれば話していただきたい。前回の自己紹介の際、市内出身の委員の中のお一人から「中学校 4 クラス時代」という話があったと思うが、子供が減っているということに関して何かコメントをいただけないか。

(委員自由発言)

子どもが少なくなったということは通勤時などに実感している。また、自分たちの年代は市外や県外に出ていった人が多く、地元に残っている人が少なく、地元に着いていない。若い年代の人も地元に着いていないのではないかと、それが原因で子どもが減っているのではないかと思う。当時、4 クラスあったということはそれだけ人数が多かったということだと思う。1 学年で約 130 人程度在籍していた。今は合併しても 2 クラスしかない学校もある。

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

今の宮内中は 1 年生だけ 2 クラス、2,3 年生が 3 クラスの編成で、70 人前後の生徒数である。

(石井コーディネーター)

つまり、約半分程度まで減っている。そうなるとやはり部活動の維持も困難になってくると考えられる。通勤の時間に実感するという意見があり、実際に数字で見ても親世代と子ども世代で半減しているが、このことについて委員の皆さんの実感としてはいかがか。

(委員自由発言)

生徒数が減っていくことで地域として沈んでいくということはわかるが、学校として生徒が減ることに対してどんなデメリットが発生するのか。

(石井コーディネーター)

学校として生徒数が減少することに対してどんな課題があるのか教えていただきたい。

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

先ほども説明した通り、教員数は学級数によって決定されるので学級数が減ると教員数が減るということがまずデメリットとして考えられる。他には、自分が赴任していた小規模の小学校において学年の人数が1人だったことがあり、教員と1対1で理科の授業を行っていたことがあった。その場合、数人の生徒間での予想・思考の比較ができず、多様な考えに触れる機会、学びを高め合う機会が極端に少ない。また、合唱やチームスポーツなどの集団で行うものに制約が発生する。生徒数が少ないと子どもたちの人間関係が固定化してしまう側面もある。学校経営の面で考えると、一人の教員が従事する業務の数が増えることも挙げられる。先ほどの意見にもあった通り、配置されている教員が少ないことから専門外の教科を担当することも発生すると考えられる。保護者の方からは、人数が少ないとずっとPTA役員をしなくてはならないとの話もあり、負担が大きいことも挙げられる。

一方、小規模の学校で学ぶメリットとしては、一人ひとりの生徒に目が行き届きやすいこと、行事などでの一人ひとりの活躍の機会が増えること、生徒同士の人間関係が深まりやすいこと、異なる学年での交流が生まれやすいことなどが挙げられる。学校経営全体で見ると、教員の雑務が必然的に少なくなることから、教員同士の意思疎通が図りやすく、相互の連携をスムーズに行うことができ、例えば、体育館の使用等融通が利きやすいこともある。学校が一体となって取り組めるという良さがある。保護者の方との連携もとりやすい。

(石井コーディネーター)

他にこんな要素がある、など皆さんから意見をいただきたい。

(委員自由発言)

生徒数減少や高齢化によって地域を支える力が落ちていくことも考えられると思う。働いている人が地域の外に出ていくという話もあったが、中学生時代にしか学べない、中学生のうちに生徒個人が興味のある分野の地元の企業を知ることができる機会づくりを進めるべきではないかと感じた。

(石井コーディネーター)

キャリア教育や職業教育というのは3,40年前に比べると進んでいると感じるが、実際のところはどうか教えていただきたい。

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

市内のどの中学校も2年生で職場体験、職業人講話などを地域総合型教育の一環として地域の皆さんに

協力していただきながら実施している。情操教育を掲げ、なるべく本物に触れる機会を教育活動の中で増やすことを意識している。進路指導を行っている、中学生の段階でこの道に進みたいと強く考えている生徒もいれば、進路に悩んでいる、探しているという生徒もいる。そのため、上級学校訪問ということで、中学三年生の段階で高校や大学、専門学校等の見学も行っている。近い将来の進路、もっと先の職業を思い描けるように、そして今できることは何かということに気付くことができるように学校教育の中にこうしたことを取り入れている。個人的な思いではあるが、地域に根差した教育も重要ではあるものの、南陽市で力をつけた子どもが世界を股にかけて活躍してほしいと思っている。そして、赤湯に記念館がある、元大蔵大臣の結城豊太郎氏のようにいつか南陽市を振り返ってお返しをしてくれるような豊かな心を持った子どもたちを育てたいと思っている。

(石井コーディネーター)

今の話のように、子どもが減るところから連想を続けて発想を広げていくというのも重要。思っていることがテーマと違うかなと思っても積極的に発言していただきたい。

(委員自由発言)

9月2日から市民大学講座というものが始まるが、自分は過去何年かにわたって参加しており、農家の方のぶどう作りの話や刀鍛冶の方の話、烏帽子山の石鳥居の話等、歴史や産業のことも含めてすごくいい話を聞くことができる場となっている。しかし、参加者が年配者ばかりで、中学生や高校生にも聞いてもらいたいと強く感じる。

(石井コーディネーター)

地域と連携した教育というのは、必ずしも地域の方が講師として登壇することだけを指すのではなく、地域の方と一緒に勉強するというのも考え方として含まれているだろうと考える。

(委員自由発言)

この市域で考えたときに、高島や川西はもう中学校が1校になっている。南陽市の人口もこれらの自治体とほとんど変わらないという状況で、今後増えていく様子もないと考えている。自分が中学生だったころは1学年の生徒が200人以上いたが、次男の学年は90人しかいない。今後も確実に右肩下がり、それもペースが落ちることなく続くはず。人数が減ることのメリットやデメリットも教えていただいて、今のことについては理解した。では、南陽市として最終的に1つの中学校にしていきたいのか、それともメリットの一つにあったように、なるべく少人数で教育やスポーツを行っていこうと考えているのかがわからないので自分ごととして落とし込むのが難しく感じる。

(石井コーディネーター)

市としての方向性が固まっていないからこそ市民の皆さんの意見を聞きたいというのが今回の会議が開催された動機の一つだと思う。私が外からやってきて少し話を聞いている限りでは、小学校の統合は限界まで耐えた段階で実施したと聞いているが、中学校に関してはまだその段階ではないものの、15年後の中学生の数は見えている状況であり、よほどの転入がない限り増えることはないことがわかっている。そのような中ではあるものの、きちんとした市としての方向性が決まっていないので、この場で意見をいた

だきながら一緒に考えたいということである。そのために委員の皆さんが現状を知ることができるよう市の職員の方々にはこうして出席していただいている。

これまで様々な要素が出てきていて、少人数校だと部活で野球やサッカーができないから学校を集約するべきだと考えることもできるし、部活は放課後のことであって、教員に負担をかけてまで学校のグラウンドでやるのではなく、レベルの高いチームに入って学校外でやるべきだと切り離して考えることもできる。

(財政課 高橋課長)

学校を一つにするかしないかという議論とは異なるが、高畠と川西は中学校が1校、南陽市は3校という状況で、クラス単位や学校単位で揃える備品については、これらの近隣自治体では毎年1つ買えばいい所を、南陽市では3つ買う必要がある。しかし、財政に余裕があるわけではないので、2つ目、3つ目を買うのに時間がかかる、また更新するにも同じように時間がかかる、他と比べて遅れていくという状況はある。

(委員自由発言)

自己紹介の時にも話したが、子どもが中学校に入学するのが12,3年後であり、このまま生徒数は減少していくと思うが、悪いことも当然あるなかで、悪いことばかりではないと思う。私自身、小学校も中学校も1クラスで同級生が十数人だったが、いじめや不登校もなく、先生方も生徒一人ひとりにしっかり指導してくれていた。今後南陽市が何に特化して教育を実施していくのか知りたいと思う。

(石井コーディネーター)

行政の計画は国が決めたものがある中で特別とがったものというのはなかなか表しにくいですが、そうしたことが聞きたいという意見をいただいた。

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

南陽市のように幼稚園・保育園の先生から中学校の先生までが一同に会して研修会をする自治体はあまりなく、教職員が子どもたちの育ちを連続的に見ているということについては、大きな特徴だと考える。他の自治体では、義務教育学校を新しく建てているところもあるが、南陽市では施設が分離していても、育ちや学びが連続的に見えるよう一貫した教育を行っている。

(石井コーディネーター)

小学校に入学した時、中学校に入学した時になじめなくなることは起こり得ることであるが、連続的に一貫していることで少しはその問題を解決することができる。

先ほどの委員は、同級生が十数人しかいなかったことに対してあまり不満を持たなかったということではないか？

(同上委員)

その通り。進学した高校には同じ中学校の同級生がいなかったのも、その時だけ世界が変わったことは実感した。

(石井コーディネーター)

前回、南陽市と同様の会議を行った市町村では、人口が 900 人程度しかおらず、小中学校の 1 学年は 6 人ほどしかいない。そうすると、保育園からずっと同じ人と関わっていくので進学に応じてのギャップがない。しかしその自治体には高校がないので、高校生になったときのギャップはある。その壁がすごく大きいという話をしていた。また、6 人しかいないということは、スポーツなら誰、勉強なら誰、話が上手いのは誰、というのが決まってしまうので競争が生まれなくなることによりすぐにあきらめてしまう子が多くなる。

(委員自由発言)

自分は中学校が 1 学年 7,8 クラスの学校に通っていたが、今日の話を知っていると少人数の学校がうらやましく思えた。大人数だと一人ひとりに目が届くわけではなく、話したことのない同級生もおり、いじめや不登校もあったと思う。メリットとしては、人数がいるとやりたいことがやれる環境ではあったこと。運動部も文化部もある程度の数があり充実していた。チームスポーツをしたいと思っても人数の問題でできないという地区が存在しているのが南陽市の現状だと知った。については、市でスポーツクラブを作るなどして、子供がやりたいことを我慢させなくてすむ取り組みがあればいいと思った。

(石井コーディネーター)

やりたいことを我慢させたくないというのはキーワードになると思う。

(委員自由発言)

これまでの意見を聞いていると、少人数の学校が意外といいという意見が挙がっているように感じるが、同級生が少ないということはその地区での同級生も少ないということになる。すると、同級生がいなかったらという理由で地域の行事への中学生の参加が少なくなる。教育という側面では少人数もいいかもしれないが、伝統行事を存続していくという側面では子どもの参加は多い方が良く考える。

(石井コーディネーター)

子ども、特に中学生となると地域にとっては活動のための戦力であり、欠かせない要因。

3 全体協議 (石井コーディネーター)後半

(石井コーディネーター)

こういう話をするときには、どうしても典型的な例やみんなに分かりやすい例の話をしがちで、スポーツの話にしても、みんなが知っている野球やサッカーの話になってしまう。違う視点も聞いてもらいたいので吹奏楽の話をしていただきたいと思う。

(委員自由発言)

吹奏楽は 8 人くらいから合奏自体はできる。

南陽市では合同音楽会において 3 校合同で演奏したりすることもある。

楽器の知識がない人が顧問になることはできない。だから普通は音楽の先生が顧問になる。そのことから地域移行は難しいと思う。

部員は 20 人程度いることが望ましい。人数が少ないと担当する楽器を変えざるを得ない状況に陥ること

もある。

(石井コーディネーター)

必ずしも 9 人いれば野球が満足にできるというわけではないのと同じで、音楽も 8 人程度から始めることはできるけど、やりたいことをしようとすると 20 人程度はいた方が良いということ。そしてちゃんとした先生に指導してもらいたいということ。場所の話はいかがか。

(同上委員)

音が大きいので、しっかりした場所がないとできない。学校の音楽室を使いたい。

(石井コーディネーター)

先程の休憩時間に同上委員に話を聞いた中で、楽器を運ばないといけないという問題もあると。エレベーターがついている中学校はあるか？

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

2 校ある。

(石井コーディネーター)

とすると、ない学校はやはり運ぶのが大変だ。

前半いろんなご指摘、ご意見をいただいてそのまま触れられていないものがあるので、それらについて話したいと思う。

財政課長から、設備を整えるのには中学校の数だけ時間がかかるという話があった。これは学校の中の設備について、また、学校の建物そのものについてもいえる。

前回配布した資料の中に、中学校がいつ建てられたかというものがあったと思うのでそちらを見ていただきたい。中学校の現状について先ほどはソフト面について話があったが、ここからはハードについて今後の不安なども含めて説明していただきたい。

(教育委員会 管理課 鈴木課長)

前回配布している資料の 4 番に中学校の築年数を記載している。3 中学校のうち、沖郷中学校と赤湯中学校については 40 年が経過している。毎年修繕費として 1 億円まではいかないものの、数千万円の修繕費がかかる状況となっている。国が出している指標であれば、学校の建て替えの目安は 43 年から 50 年の間が一番多いとされている。これを踏まえると、宮内中学校以外の中学校については学校施設そのものをどうしていくかということが今後の課題になる。建て替えを選択するのか、あるいは大規模な改修をして使用する年数を伸ばすのか。

本日配布している資料のうち「これからの南陽市の公共施設のあり方の検討について」の下部にグラフを記載している。これは、令和 2 年に作成したもので、①公共施設を建て替えて維持していく場合、②建て替えではなく、80 年間程度施設が維持できるよう大規模改修を行って維持していく場合に分けてそれぞれの程度の額が必要になるかシミュレーションしたものである。

①の場合、40 年間で 271 億円必要となり、毎年 6.8 億円必要となる。②の場合、40 年間で 243 億円、

毎年 6.1 億円必要となる。

公共施設すべてを今後も維持するのではなく、いらぬものはなくす、統合できるものは統合するというプロセスを経て令和 28 年度までの間に 20%程度床面積を減らしていかないと、財政的に厳しいという試算に基づき、今の学校施設全体の量を 20%減らした場合のグラフが③。この場合 40 年間で 197 億円、毎年 5 億円が必要ということになる。実際にこのシミュレーションをしたときの直近 5 年間において学校の維持修繕にかかった額は、平均して年間 2.9 億円である。今の財政規模がずっと続けば 2.9 億円は毎年度用立てをすることができるが、上記グラフの一番コストがかからない方法を選択したとしても年間 5 億円は必要であることから、年間約 2.1 億円をどこから用立てをするかという非常に厳しい状況にある。

(石井コーディネーター)

要するに、お金のことを考えると、子どもだけではなくて全体の人口が減少している状況において、今の施設をそのまま維持していくのは学校に限らず公共施設すべてにおいて厳しい状況にあるということ。では、学校に関してはどうしましょうかというところが委員の皆さんに対しての質問であり、ご意見をいただきたいところである。どんな優先順位で、どんなふうに進めていけば、子どもにも大人にも影響が出ないのか、すごく難しい問題を提起していただいている。これは南陽市だけがつらい状況なわけではなく、どこの市でも抱えている問題。私の市では大規模改修を始めようとしているところ。なぜ大規模改修を選んだかという、私の市には土地がほとんどなく、新しく建て替えるとその間子どもたちが行く場所がなくなってしまうので、グラウンドにプレハブを建てて、今の施設の改修を何年にもわたって行っていくということになった。もう一つの理由は、子どもが確実に減るという状況の中で、今の規模のまま建て替えてしまうと効率が悪いので、あと 30 年は今回の大規模改修で施設の規模をキープして、その間に他の学区もあわせて将来を考えようということにした。

しかし大規模改修も結構大変で、工事中の 6 年間は運動会ができないので近くのグラウンドを借りる必要があるし、保護者の方に対して説明会などを行うが、その方々の子どものほとんどは新しい校舎を使うことがないということになる。不便をかける方だけに集まっていただくことになるのですごく大変だが、いつかはやらないといけないことである。子どもの教室を安全に快適にキープしなければいけないことを考えると、大変なプロジェクトではあるが進めなくてはならない。先ほどの子どもが減るとの話とお金が減るとの話、そんな状況の中で建物や設備をどう運営していくかという話はセットになる。

(委員自由発言)

少人数校の良さもあるということから、すぐに統合して一つにする必要性は薄いかと考えるが、いつかはしないといけないということで、折衷案ではないが、学校と他の公共施設を一体化するというのはどうか。図書館や体育館を 1 つにまとめて地域にも開放するなど。ただし、セキュリティの問題等あるかと思うので、そうしたことは国や市として可能なのか。場合によっては小学校教育では使わない施設が付随していてもいいかもしれない。

(財政課 高橋課長)

自治体において公共施設は今のまま維持できないだろうということで、目的が違う保育園と福祉センターを一緒にするという形で国からの有利な財源を使うことができる、公共施設等適正管理推進事業債とい

う制度がある。図書館を地域の中に開放しているという話は聞いたことがある。

(石井コーディネーター)

小学校の図書館に関しては、まちの図書館と蔵書がかなり異なるので地域に開放するのは厳しいかもしれないが、地域の図書館をやめて、中学校の図書館を地域に開放することで、中学生と地域の高齢者が一緒に学べるような場所にしてもいいかもしれない。体育館に関しても、地域の体育館を減らして、学校の体育館を地域に開放する考え方もあると思う。

複合化という意味では、小学校の教室がたくさんあって、そこに中学生が入っても問題ないのであれば 1 つにしてしまうという考え方もある。

(委員自由発言)

中学校 3 校を 1 つにした場合、残った 2 校の施設をどう活用するかという話もできるのでは。例えば民間の力を借りるなど。

(財政課 高橋課長)

廃校にしてしまった学校を活用するというのは全国的に苦戦している例の方が多いと感じる。

(石井コーディネーター)

廃校になった施設を利用して収益をあげることができるのであれば、ということになるだろう。

(委員自由発言)

小学校はなくなりましたが、でも図書館は残してほしい、使えるのであればそのままにする、ということはあるか。

(石井コーディネーター)

それは他市に事例があるはず。例えば、校舎の建物はなくして体育館としてだけ地域の方が活用している例などがあると思う。

複合や転用というのはそれぞれの地域におけるニーズに応じて、できる限りコストがかからない形、収益があげられる形があるなら可能だと考える。

(委員自由発言)

生徒数が少なくなったという話が続いているが、40 人学級が 30 人学級になったということで、学級数はそんなに減っていないのではないかと感じる。空き教室があるなど、現状を教えてください。

(石井コーディネーター)

確かに、生徒数の減少と学級数の減少は必ずしも一致することではないと考える。

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

学級数も減ってきている。しかしながら、山形県の政策で、標準的な人数よりも少ない人数で学級編成を

してもいい「さんさんプラン」という制度がある。中学校 3 校についてはほとんどの学年がその制度を適用し、3 クラスで運営している状況にある。沖郷中学校は全学年 3 クラス、赤湯中学校は 1 年生が 3 クラスで 2,3 年生が 4 クラス、宮内中学校は 1 年生が 2 クラスで 2,3 年生が 3 クラスという状況。この制度は 1 学年が 33 人で 1 クラス、34 人になると 2 クラスになるというもの。例えば、宮内中学校の 3 年生は 69 人在籍しており、法に基づけば 1 クラス 35 人なので 2 クラスとなるが、山形県の政策により 3 クラス編成が可能となっている。

(石井コーディネーター)

69 人で 3 クラスということは 1 クラスが 23 人ということになる、少人数編成で目が行き届くという面ではメリットだと考えられる。一番古い学校で、今は全体の学級数が 9 クラスだが、教室は昔の 4 クラス時代のままで 12 室あるとか、15 室あって空き教室が発生しているなどということはあるか？

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

例えば赤湯中学校は 1 フロアに 5 室あるが、現在は 4 クラスとなり各フロアで 1 室ずつ余るという状況にある。しかし、空いた教室をそのままにするのではなく、生徒が話し合いをする部屋にしたり、教室に入りづらい生徒のための静かな学習スペースにしたりして別用途で活用している。何にも使われることなく放置されているような教室はない。

(石井コーディネーター)

各フロアで 1 室ずつ程度空いている状態では、そんなに空いているという感覚にはならないと思う。息子が通っていた中学校は 30 室ある学校だったが、12 クラスしか生徒がいなかったのが半分以上使っていなかった。しかし、空き教室は少人数用の授業の教室にするなどして当時とは使い方が変わっていた。他には、教室とは別に更衣室を設けていた。こうした活用をしていると、半分くらい空いていてもそれなりに使われている印象がある。したがって、空き教室を地域の図書館にしたり、集会場にしたりするのはすぐには難しいのではないだろうか。

(同上委員)

建て替えにする場合はフリーに使える教室は設けられないということか？

(石井コーディネーター)

建て替えの場合、生徒数に応じて必要な数だけを作ることはできないだろう。一般的には建物全体の大きさを小さくして建てることになるはず。大規模改修だと変動なしにできる可能性はある。

設備のことで言うと、エアコンが入っているということも今の学校の特徴だと考えられる。エアコンの設置率はどのくらいか。また、エアコンの耐久年数はどれくらいか。

(教育委員会 管理課 鈴木課長)

全教室に設置している。耐久年数は 20 年くらい。

(委員自由発言)

特別支援学級の学級数についてはいかがか。

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

市内の中学校だと 4 クラスある。すべてのクラスごとに教室を用意している。年度によって在籍する生徒数やクラスも違うため、都度柔軟に対応している。

(石井コーディネーター)

特別支援学級に関することも昔とは状況が変わってきており、1 年 1 組、1 年 2 組などとは別で教室を設けることが一般的になっている。先ほど空き教室の話があったが、それらを活用している例もしばしば見受けられる。

(委員自由発言)

米沢市では、大規模改修を行った小学校や中学校があるが、大規模改修から何年か経った後に統廃合になり、たくさんのお金をかけたのに結局使わなくなっている事例があるので、そうしたことも考えないといけないだろう。

(石井コーディネーター)

計画的に行わないといけないということ。その例で考えると、結果的に廃校になるのであれば違う選択肢があったのかもしれない。

(委員自由発言)

実際に私が中高生のころ、隣の小学校が規模を小さくして建て替えをしたが、とあるきっかけで生徒数が増加したということがあった。そういう面を考えても建て替えはすごくリスクが高いと思う。南陽市が、これから人口が増えるかと言われると難しいかとは思いますが、気持ちとしては人数が減らないでほしいし、建て替えよりは大規模改修の方が良いか考える。

(石井コーディネーター)

先ほども申し上げたが、建て替えにはすごく時間がかかり、着工後に環境が変わってしまうということがあがる。しかしながら計画が始まってしまうとなかなか変更はできない。そのほか学校の施設関係でご意見いかがか。

(委員自由発言)

先ほど大規模改修を行うと 40 年程度使用年数が伸びて 80 年間ほど使えるようになるということだったが、この年数は何か目安となるものがあるのか。

(教育委員会 管理課 鈴木課長)

築年数が 40 年以上経過した学校施設に対して長寿命化改修を行い、改修後 30 年以上使用できるものにするということが、学校を改修するための予算を国に申請する際の条件として決められている。したがって 80 年という期間が目安になる。

(同上委員)

大規模改修後の大規模改修というのは可能か。普通の家だとあり得ない話だと思うが。

(教育委員会 管理課 鈴木課長)

学校施設を改修するには必ず、コンクリートが今後 30 年間耐えられるかどうかの強度テストをする。つまり、大規模改修を経て 80 年が経過した施設のコンクリートのテストをして、その先 30 年間使用できるのであれば理論上可能ではある。

(石井コーディネーター)

直近何年かで耐震強度の確保のために工事をしている建物が多く見受けられるが、その工事をしている時点でそもそもそんなに頑丈ではないという建物も多いはず。

(委員自由発言)

陸上競技の大会で使用されるのと同じようなゴムのトラックが南陽市にはなく、一ヶ月に 2,3 回高畠まで行かないと大会と同じコンディションでの練習ができない。送迎も大変。南陽市にもトラックがあればいいなと思う。

(石井コーディネーター)

特殊な設備や施設というのは、3 校の中学校すべてに設けるということは難しく、市町によって状況が様々だと考えられる。

こういうものがあつたらいい、ほしいという意見も、今後の中学校を考えるうえでの視点だといえる。予算が不足しているという今の状況ですべてがかなうわけではないが、使わせてあげたいという気持ちは大事にしたい。

(委員自由発言)

40 年前のトイレは和式だった。今はほとんどが洋式になっているが、車いすの方やけがをして松葉杖を使っている方が楽に使えるような広いトイレがあつたらいいなと思うが、現状はどうなっているか。

(石井コーディネーター)

前回、学校のトイレは洋式化されているものの、臭いの問題があるという意見が出た。洋式化のことを説明していただいて、補足として多目的、バリアフリートイレのことも教えていただきたい。

(教育委員会 管理課 鈴木課長)

令和 2 年度の段階では 45%程度しか洋式化できていなかった。令和 4 年度に洋式化工事を行い、赤湯幼稚園も含めて平均 72%程度まで洋式化された。バリアフリーのトイレは今の段階では設置されていない。

(石井コーディネーター)

車いすのまま入ることができるようなトイレというのはないということ。

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

少し広いトイレはあるが専用設計のものはない。

(石井コーディネーター)

特別支援学級の話にもあった通り、今はいろんなお子さんが学区の小学校に入学している中で、なんらかの医療的なケアが必要だったり、車いすの方への配慮が必要だったり、トイレやエレベーターのことなどについては全国的に課題として対応が求められている部分である。

(委員自由発言)

難病を患っている身内がおり、小学校にはエレベーターもあり、トイレも完備されていたので地域の小学校に通うことができた。しかし、中学校は移動もトイレも設備がなく、地域の学校に進学することはできなかった。学校の設備を充実させることも考え方の一つだが、そうした設備が備わっている施設・場所で学校教育が受けられるようになることも手段の一つではないかと考える。

(石井コーディネーター)

これから先のことを考えて、今ある施設だけを維持していくのではなく、どんな方が使うかを考えて準備をしておくことが重要。

(委員自由発言)

市内で廃校となった小中学校は今現在どのように使用されているのか。

(教育委員会 管理課 鈴木課長)

指定避難所にはなっている。学校教育の資料などを収蔵する施設として活用しようという計画もある。

(委員自由発言)

中学三年生になると受験勉強が始まるが、勉強する施設が市内には図書館しかない。他に施設はあるか？

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

現在は図書館しかない状況。老朽化により改修予定の宮内公民館については、学生が学習できるスペースを設けるべきではないかという意見が挙がっており、一つの検討材料となっている。

(石井コーディネーター)

私は少し前まで公民館の館長をしていたが、公民館の会議室の予約が入っていないときは中高生に開放していた。逗子市では貸し勉強部屋みたいなものがビジネスとして成り立っていて、学校帰りに学生がお金を払って使用している事例もある。

学校の施設を考える際は、学校以外の公共施設や民間の施設がどの程度整備されているかということにも影響してくると考えられる。市内のプールの状況はいかがか。

(教育委員会 管理課 鈴木課長)

7つの小学校のうち6校に備わっている。市民プールは1つある。中学校のプールはない。

(石井コーディネーター)

プールは全国的に課題になっている部分で、造ることに費用がかかり、水の使用料や管理にも費用や手間がかかるため大変。逗子市では部活がある中学校のプールを残して小学校は廃止し、市営の温水プールに集約するという決定をした。温水プールを使用することで、年間を通して使用することができ、熱中症を気にすることなく授業ができる。また、市営プールの稼働率を上げることで将来的に修繕を行う際の負担軽減にもつながる。

(委員自由発言)

最近夏は気温が上がりすぎて、毎日のようにプールの使用が禁止になる。将来的に可能であれば授業で屋内プールを使用できればいいと思う。

(教育委員会 管理課 鈴木課長)

米沢で熱中症の事故があったことを受け、安全第一で、プールに入ることができる基準を厳しくしたことも影響しているかと考えられる。

(石井コーディネーター)

基準を超えてしまうとプールだけに限らず屋外での授業が中止になってしまう。ここ数年だけ特別に暑いのか、今後もずっと暑いのかはわからないが、これからも考えていかないといけないことになる。

(委員自由発言)

小学校でスキーの授業があるのに、中学校に進むとなくなる。そして高校に進学するとまたスキーの授業がある。中学校でも実施してほしいと感じる。中学校で授業がないので、南陽市の生徒は下の方のクラスに分類されることが多い。

(石井コーディネーター)

あと15分となったのでここからは今日思ったことをなんでも発言して OK。

(委員自由発言)

スキー授業はおそらく文科省が定めているようなものではないと思うが、その前提だと、ある程度自由に授業の内容を決めてもいいものか。

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

体育の授業においては、地域の特色に応じて授業内容を決めることができるのでスケートやスキーなどを行っている地域もあるという状況である。

(同上委員発言)

スキーだけではなくスノーボードを選択してもいいという制度になってほしい。

(委員自由発言)

南陽高校ではスキーの授業の際、備品をレンタルすることができる。それを小学校でもできるようにしてほしい。

(教育委員会 学校教育課 佐野課長)

現在は提携事業者との間でレンタルができるようになっている。

(委員自由発言)

スキーの授業のために備品をそろえないといけないことが負担であり、なくしてほしいという声があるのも事実。

(石井コーディネーター)

両方の視点から考えることが重要なのでぜひそうした意見をいただきたい。

(委員自由発言)

自分は南陽市出身ではないのでそうした授業を受けてこなかったが、雪国ならではの経験ができることをうらやましく思う。せっかくこの地域だからこそできることなので負担を軽減して気軽に参加できるようにした方が良いと思う。

(石井コーディネーター)

大体、時間が終わりに近づいてきたので、最初に申し上げた改善提案シートの記入に移っていただきたい。書いていただいているシートは我々の方で集計し、今日のテーマに関して皆さんがどんな課題を感じているかということを整理し、まとめたものを次回の資料として提示する。

本日は活発なご意見をいただきありがとうございました。次回も積極的なご参加をお願いします。また、本日はマイクなしで進行したが、聞こえにくかったということであればアンケートに記入していただきたい。

(全体協議終了)

以上